



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4111 号 2017.12.31 発行

京大研究「赤ちゃん脳の成熟 反映」

中日新聞 2017年12月23日



生まれて間もない赤ちゃんは、泣き声の音域が広く、泣き方のバリエーションが豊かな方が、言語や認知機能の発達が良好との研究結果を、京都大の明和政子教授（発達科学）らのチームが22日付の海外の科学誌電子版に発表した。

明和教授は「脳の成熟が泣き声に反映されている可能性がある。泣き声の分析が発育状況の予測に役立つかもしれない」としている。

チームは、京大病院で妊娠37週未満に生まれた早産の赤ちゃん77人、満期を迎えて生まれた30人の赤ちゃんが授乳の前に泣いた声を録音し、音域の変動や泣き方の複雑さに着目して解析した。

さらに、それぞれの赤ちゃんが1歳半になった頃、花や車が描かれたカードや、積み木などを示し、話せる言葉の多さを調べることで言語や認知の能力を検査した。

その結果、泣き声の音域が広く、泣き声に複雑な変化がある方が、検査成績が良かったという。

早産の赤ちゃんは言葉を話し始める時期が遅くなるリスクがあるとの研究結果がこれまでに報告されているが、チームは、泣き方が多彩であればリスクは低い、と指摘している。

チームは、京大病院で妊娠37週未満

抗がん剤 560億円節減可能...廃棄分を別の患者に、慶大教授報告

読売新聞 2017年12月29日

高額な抗がん剤を無駄なく利用することで、年間560億円の医療費が節減できるという研究報告書を慶応大学の岩本隆特任教授（経営学）がまとめた。

近年、オプジーボなど高額な抗がん剤が次々と登場。多くが瓶入りで、体重に応じて投与量が決まるため、余って捨てる分が出る。高齢者で平均的な体格の体重63キログラムの肺がん患者に同薬を使用した場合、廃棄額は1回約4万円になる。

岩本特任教授は、瓶から注射器で取り出すタイプの約100種類の抗がん剤を対象に、調査を実施。2016年7月～17年6月の出荷実績（7566億円）や、国立がん研究センター中央病院（東京）での廃棄実績などをもとに、国内の年間総廃棄額を推計したところ、738億円に上った。

さらに、瓶から取り出す際、薬剤師が、閉鎖式接続器具を装着すれば、安全なまま廃棄分を別の患者に利用できると想定。総廃棄額から器具代（2000円程度）などのコストを差し引いた「医療費抑制額」を、年間560億円とした。

岩本特任教授は「薬の安全性と有効性をどう確保するかなど課題も大きいですが、膨れあが

る医療費を抑えるための一つの有効策になると思う」と話している。

抗がん剤の瓶には、20ミリ・グラム、100ミリ・グラムなど、様々な大きさがある。

古民家改装、地域の福祉拠点に 京都・与謝野、朝カフェも



京都新聞 2017年12月29日
空き家になった離れを改装してオープンした「アケテラス」。気軽に集える地域の福祉拠点を目指す(京都府与謝野町明石)

京都府与謝野町の理学療法士夫妻が、同町明石(あけし)の古民家を改装した居場所「アケテラス」をオープンさせた。専門知識を生かした介護相談や体操教室も行う。今月から朝カフェを開いており「地域の人が気軽に集える場所にしたい」と意気込んでいる。

2004年に熊本市から同町明石に移住した松本健史さん(45)、泰子さん(40)。

知人から長年空き家で取り壊しを考えている木造平屋の離れがあると聞いた。「地域で役に立つ場所にしたい」と熱意を伝え、家主に貸してもらえることになった。

リハビリ介護現場が長い健史さん。「体が動くようになっても行く場所がないお年寄りも多い。施設でのリハビリには限界があると感じた」と話す。施設とは違う切り口で関われないかと、独居高齢者も増える明石地区に地域福祉の拠点を作ることにした。

改装に当たって府が進める「京都ちーびず(地域力ビジネス)」の助成金を活用。宮津町家再生ネットワークの協力で昨年末から取り掛かり、今月お披露目した。土壁や畳、タンスなど元々あったものを残し、昔ながらの趣のある雰囲気が漂う。

今月18日から軽食と飲み物を提供する朝カフェを実施。友人たちと訪れた近くの糸井直子さん(65)は「近くに店がなくちょっと集まっておしゃべりできる場所があればと思っていた。散歩がてら寄れるのでありがたい」と感謝する。

参加者がスイーツを作って持ってきてくれることも。健史さんは「居場所と役割があると長く元気でいられる。ここでそれが実現できれば」と話している。日替わり軽食と飲み物で400円。貸しスペースとしても利用できる。問い合わせは松本健史さん090(5013)5777。

性暴力「あなたは悪くない」支えに 教諭から被害の元生徒

京都新聞 2017年12月30日
裁判の記録をとじたファイルに手を置く女性。「いつか元気になった時に見直したら『私、頑張ったんだ』って思えるかな」と話す

京都地裁で今年11月、京都市立校の教諭から受けた性暴力で精神的苦痛を受けたとして市に損害賠償を求めた裁判の判決があり、市内の女性(23)が勝訴した。知人が加害者である多くの性暴力被害者同様、女性も「自分にも落ち度があったのでは」と悩んだが、支えたのは「あなたは何も悪くない」という支援者の言葉だった。

■悩みを聞いてもらえた後で...

女性は、鳴滝総合支援学校高等部(右京区)に在学中だった2012年、同校の教諭だった男性(60)＝14年3月に懲戒免職＝に悩みを話すうちに親しくなり、性的関係を持つよう誘われた。「先生は、私のことを否定せず話を聞いてくれた初めての人だった」



幼いころから家族に虐待を受けて育った。小学校低学年の時、家の冷凍庫の氷を食べたとがめられ、「罰」として氷入りの風呂に入れられた。「唯一の味方は祖父でした」

小学校高学年。祖父から性器を口に入れられたりする性的虐待を受けた。家族に打ち明けたら「誰にも言ったらあかん」と口止めされた。祖父の要求は続いた。家の中に居場所のない日々。初めて悩みを聞いてくれたのが元教諭だった。

高校2年のころから自分のことを少しずつ話すようになった。3年の夏休み。初めて校外で会った日に性的関係を持った。以来、毎日のように求められた。

妻帯者であるのは知っていた。離婚を考えていると聞かされ、自分は大切にされていると思った。だからこそ、卒業後も離婚しない元教諭が信じられなくなって会うのをやめた後も「私も悪かったのでは」と悩んだ。

身近な家族から虐待を受け続け、嫌なことも「自分が悪い」と捉えるようになっていた。怒りの感情がどのようなものか分からなくなり、心の中のモヤモヤとした気持ちがあまく表現できなかった。そんな女性に代わって怒りをあらわにしたのは相談機関のカウンセラーや無料法律相談の弁護士だった。

■自責から抜け、勇気持ち裁判へ

『なにその男！？』って、自分のことのように怒ってくれたんです。裁判に訴える勇気をもたらした。知人から「元恋人を訴えるのか」と批判された時は、支援者の言葉を自分に言い聞かせた。「あなたは何も悪くないんだよ」

悩みを聞いてもらったから。信頼を寄せていたから。「それらは何一つ、性的関係を持つ理由にはなりません」。京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センター（京都SARA）＝中京区＝のスーパーバイザー周藤由美子さんは指摘する。

「恋人関係のようでも、教師と生徒といった圧倒的な力関係の中では性暴力と変わらない。本当の意味での合意の上での性関係とは言えないのです」

女性は、今も男性に対する極端な恐怖心から外出もままならない。それでも、裁判の分厚いファイルを見ると「これは私が暴力に立ち向かった証し」と思える。「これからは、私と同じようにつらい思いをしている人の力になりたい」

<裁判の経過> 男性との関係や学校の対応で精神的苦痛を受けたとして、女性が昨年3月、市を相手に450万円の損害賠償を求めて京都地裁に提訴した。判決では元教諭の行為を「女性の性的自由を侵害する不法行為」と指摘。「地位がなければ男女関係の継続はなく、性的自由の侵害は職務と一体不可分」として市に150万円の支払いを命じた。

ヘルプマーク 理解を 京急が普及活動 難病や義足、配慮呼びかけ / 神奈川



毎日新聞 2017年12月29日
「ヘルプマーク」普及に向けたポスターを駅に掲示する京急駅員＝横浜市西区の京急横浜駅で

難病や内部障害、義足、妊娠初期など、外見では分かりにくいものの配慮を必要とする人のための「ヘルプマーク」を広めるため、県内に大半の駅がある京急電鉄（本社・東京）が駅にポスターを張るなどの普及活動を始めた。こうした取り組みは、県内を走る私鉄では初めて。「マークを携帯していても席を譲られなかった」との声が複数寄せられている

県の担当課は、京急を皮切りに、交通機関による啓発が広がることを期待している。ヘルプマークは2012年に東京都が作製した。

「油かすはソウルフード」 被差別部落の「いま」発信 田中陽子

朝日新聞 2017年12月30日

部落差別は昔のこと、私には関係ない——。そう考える人がいるかもしれません。しかし最近では、ネットで情報を拡散する新たな形の差別が生まれています。一方、被差別部落の問題や暮らしの「いま」を知ってほしいと、出身者らがネットで発信し、緩やかなつながりを広げています。

「正しい情報を」出身者らが発信

2011年に開設されたサイト「BURAKU HERITAGE (ヘリテージ、BH)」は、個々人の体験や思いを軸に、被差別部落に関わる多彩な情報を掲載している。ヘリテージとは、受け継いでいく遺産や伝統という意味。差別の問題だけでなく、その土地の人や文化についても伝えている。

東京や大阪に住む30～50代の男女8人が運営する。被差別部落出身者や研究者、NPO職員など立場は様々だ。立ち上げメンバーのひとり、東京都の上川多実さん(37)は両親が被差別部落出身。「私たちはそれぞれの暮らしのなかで部落問題にぶつかったり悩んだりしている。『わたし』という個人の顔で発信することで、差別しにくくなれば」と話す。



「被差別部落出身と語ることで、その地区や自分の家族が差別されるリスクもある」。ABDARCのイベントでは、カミングアウトをめぐる悩みや葛藤を話し合った＝9月、東京都渋谷区

きっかけは長女(9)が生まれたことだった。就職や結婚で差別を受けないか不安だった自身を振り返り、「私1人なら



乗り越えられる。でも、子どもが差別に遭ったらどうするのか。どう伝えるのか」と考え始めた。ネットで「部落」を検索すると、地名や出身者を暴く、うそや差別的な情報が次々に表示された。正しい情報を発信しなければと考えた。

BHのサイトには、被差別部落に関わる本の紹介や、メンバーが体験や思いを語り合う「テーマトーク」がある。葛藤も素直に表現し、暮らしや気持ちに変化があれば、書き加えていきたいという。

13年末から、東京と大阪で年1回ずつをめどに交流会を開く。被差別部落に関心を持った20～30人が毎回参加する。今年、大阪の交流会では、みんなで「部落」「同和」をネットで検索してみた。出てきた情報を目にした参加者が共に憤ってくれる様子に、上川さんは気が楽になった。「立場の異なる人たちが気持ちを共有することから始めたい」と話す。

BH「テーマトーク」の一例

◇差別的な言動にどう対処？

- ・「確実にその場では対処できません...今のところ」
- ・「ショックでした。言われたことよりも、とっさに言い返せなかった自分に」

◇あなたの好きな部落の食べ物は？

- ・「さいぼし！ 馬肉の燻製(くんせい)。ビールにめっちゃ合う」

・『これ（油かす）を食べてることは言ったらあかんでえ〜』と母から言われていました。（中略）ちょっぴり切ない我が家のソウルフードです」

◇部落問題に関わっていてよかったことは？

・「差別や、社会で起きている“おかしいこと”に対して、問題意識のアンテナが立つようになったこと」

・「社会的な課題に真摯（しんし）に取り組む人たちとたくさん出会えたこと」

障害者虐待 7 件 16 年度県内施設、性的虐待も 1 件

東京新聞 2017 年 12 月 30 日 群馬

県内の障害者福祉施設で二〇一六年度、職員による障害者への虐待が七件あったことが県のまとめで分かった。身体的虐待が最も多かった。個別のケースについて県は詳細を公表していないが、身体的虐待で重傷はないという。入所女性への性的虐待も一件あった。

県によると、職員による虐待が確認されたのは障害者支援施設（入所）が三件、居宅介護が一件、障害者と雇用契約を結ぶ就労継続支援 A 型が一件、生活介護一件、障害児の入所支援一件だった。前年度の九件から二件減った。

一つの事例で複数の虐待が行われているケースもあった。虐待の内容は障害者をたたき、足で押さえるなど身体的虐待が六件、暴言など心理的虐待が二件、二十代女性への性的虐待一件。虐待を行った職員の職種は、六件が障害者の日常生活に密着して仕事をする生活支援員、一件が看護職員だった。

虐待があった施設に対し、県や地元自治体は改善指導や、改善計画を提出させるなど改善勧告を行った。

障害者の家族や雇用先の事業主など施設以外を含め、県が把握している一六年度の虐待件数は二十七件（前年度比一件減）。内訳は施設七件のほか、家族や親族ら養護者による虐待が九件（四件減）、事業主ら使用者による虐待は十一件（五件増）。虐待種別では身体的虐待十二件、心理的虐待十件、放棄・放置（ネグレクト）五件、経済的虐待五件、性的虐待一件だった。

県障害政策課の担当者は「施設への研修や関係機関とのネットワーク会議などを通じて虐待防止の強化に引き続き取り組む」と話した。（石井宏昌）

障害者雇用、最多 5041 人 最高更新も全国 37 位

東京新聞 2017 年 12 月 30 日

群馬労働局は県内の企業（従業員五十人以上）で働く障害者の人数が六月一日現在で、前年比 5・4% 増の五〇四一・五人になったと発表した。雇用者全体に占める割合を示す実雇用率も前年比 0・06 ポイントアップの 1・96% で、ともに過去最高を更新した。しかし、全国的にみると、実雇用率は都道府県別で三十七位（前年三十四位）と低迷。公的機関では富岡市などが障害者雇用促進法で定める法定雇用率を達成できなかった。（石井宏昌）

対象企業は千三百七十八社で、うち 57・5% が民間企業の法定雇用率 2・0% を達成した。達成企業の割合は前年を 1・1 ポイント上回り、全国順位は二十七位（前年二十五位）になった。

法定雇用率を満たす企業が増えたことで、雇用障害者数や実雇用率も向上したが、全国的には順位を下げた。企業の法定雇用率が来年四月から 2・2% に引き上げられることを背景に、全国で積極的に障害者を採用する動きがあり、県内では「障害者雇用は増えているが、中小企業が多いことなどもあり、全国と比較するとやや伸びが低い」（群馬労働局担当者）という。

公的機関では県の四機関と三十四市町村、六つの教育委員会、独立行政法人三機関が法定雇用率の雇用義務があるが、六月一日現在で安中市と富岡市が法定雇用率 2・3% を満

たしていなかった。安中市はその後に達成した。

渡辺和子さん遺志継ぎ保育所設置 著作権収入で旭川荘に19年春

山陽新聞 2017年12月30日

社会福祉法人・旭川荘（岡山市北区祇園）は、ノートルダム清心学園前理事長の故・渡辺和子さんから相続した著作権の収入を活用し、2019年4月、障害者施設を集めた「ひらた旭川荘」（同平田）内に保育所を開設する。「著作権を障害者らのために」との遺志を継ぎ、医療や福祉のノウハウを生かして障害児や



医療的ケアが必要な子どもを健常児とともに受け入れる。渡辺さんの死去から30日で1年。

故・渡辺和子さん

旭川荘が保育所の新設を計画している「ひらた旭川荘」

渡辺さんは修道者として信仰と教育に身をささげる傍らベストセラー「置かれた



場所で咲きなさい」など多数の著書を残し、89歳で亡くなった。旭川荘とは江草安彦名誉理事長（故人）が学園役員に就くなど関係が深く、遺言で「恵まれない子どもたちや障害のある人、高齢者のために使って」と著作権を託していた。

旭川荘は1956年の創設以来初となる保育所の設置を以前から検討しており、今年10月末に岡山市の認可保育所運営事業者に選ばれた。その上で渡辺さんの遺族に著作権収入の利用について打診し、快諾を得たという。収入をどの程度活用するかは今後内部で協議して詰める。

計画では保育所は定員90人。障害児は重度の発達障害児など定員の15%程度を想定し、受け入れ規模は岡山市内に11施設ある障害児保育拠点園（定員10～12人）並みか、それ以上となる。スタッフは高い専門性を備えた保育士のほか、たんの吸引などの医療的ケアが欠かせない子どものために看護師も配置する。建物は鉄骨2階延べ約1千平方メートルで、一般保育室や障害児の専用保育室などを設ける。



ひらた旭川荘は、市が保育所の整備を募る中学校区内にあり、発達障害児や重症心身障害児向けなど旭川荘の施設が集まっている。保育所は各施設と連携し、障害児がいる家庭のケアや妊産婦のための子育て教室も開く予定。重症児の母親の就労支援のため、就職活動中の一時保育も受け入れる。

渡辺さんのめいの小林依子さん（84）＝東京都＝は「叔母が半世紀以上お世話になった江草名誉理事長への恩返しに遺贈した。修道者として助けを求める人に寄り添いたいと願った叔母の思いを生かしてもらえると喜ぶ。旭川荘の末光茂理事長は「貴重な財産を活用させていただき、大変ありがたい。障害の有無にかかわらず、誰もが心豊かに育つような保育を心掛けたい」と話している。

18トリソミー 宝物の子ら、写真集に 親が出版を計画 毎日新聞 2017年12月30日

染色体の異常で起きる重い障害「18トリソミー」の子どもたちのことを知ってほしいと、各地で写真展を開いてきた当事者団体が、10周年の節目に写真集の出版を計画している。募集に応じて写真を寄せてくれた家族は約300。一家の宝物として大切にされて

いる子どもたちの姿を生き生きと写し出している。

当事者団体「Team (チーム) 18」代表の岸本太一さん(33)の長女心咲(みさき)ちゃんは今年2月2日、6歳の誕生日を迎えた。歩いたりしゃべったりすることは難しいが、表情豊かに喜怒哀楽を表す。週2回は介助を受けながら地域の保育園に通い、友達もいる。3人の妹たちとも仲良しだ。



心咲ちゃんが18トリソミーと分かったのは、まだ胎内にいる時。流産や死産することも多く、医師は「おなかの中で亡くなるのを待ちましょう」と告げた。岸本さんは「同じ命が区別されていると感じた」と振り返る。

プールで一緒に水中に潜る岸本太一さんと心咲ちゃん。写真集に掲載される予定だ＝岸本さん提供

妹たちに囲まれる
岸本心咲ちゃん
(左から2人目)。
装具をつけて立て
るようになった＝
岸本さん提供



子育てに奮闘しながら18トリソミーの情報を探す中で、Team18の活動を知り参加。代表を引き継いだ。家族の写真展はこれまでに全国30カ所を巡回し、10年を迎えるのを機に、より広く知ってもらおうと写真集の出版を決めた。

今年11月、1家族2点の写真と「18っ子」の紹介文を募集したところ、当初の見込みを上回る298件の応募があった。水曜社からの出版が決まっているが、3000部の発行を目指して資金を調達中で、インターネットのクラウドファンディングによる寄付を募っている。

この10年で、妊婦の血液で胎児の先天性の病気を調べる新型の出生前診断が広がった。岸本さんはそれを否定はしないが「『重い障害＝不幸』という考え方はしてほしくない。写真集を通して命の尊さを知ってほしい」と訴える。寄付は専用サイト(<https://readyfor.jp/projects/team18-18trisomy>)で受け付けている。【下桐実雅子】

【ことば】18トリソミー

染色体異常症の一つ。46本ある染色体のうち18番目の数が1本多い。3500～8500人に1人の割合で生まれるとされ、心臓や呼吸器の病気を併発しやすい。積極的な治療はしないという考え方が医療現場にあったが、近年、治療や手術によって生存期間が延びることが分かってきた。医療的なケアを受けながら、在宅で過ごす子も増えている。

VR 子どもの目への負担軽減 技術開発の動き拡大 NHKニュース 2017年12月30日
仮想の世界を現実のように体験できるVRの技術は、ゲーム機などへの利用が広がっていて、メーカーの間では、子どもの目への負担を減らす独自の技術を開発する動きが広がっています。

ゲーム機などに使われているVRは、微妙にずらした2つの画面で立体感を出し、ゴーグル型の端末で見る形がほとんどですが、メーカー各社は目への負担を考慮して13歳未満の人は使用を控えるよう呼びかけるなどの対応をとっています。

こうした中、ゲームメーカーの「グリー」は、目への負担を抑えたというヘルメット型のVR端末を開発しました。この端末は、鏡などを使うことで1つの画面でも臨場感を損ねないようにする技術を使っているということです。

利用時間も1回5分程度に設定することで、3歳から使えるようにしたということで、この端末を使ったゲーム機は来年夏までに流通大手のイオングループの全国の200店舗に設置される計画です。

グリーの渡邊賢さんは「13歳までVRの体験ができない状況を変えたいと考えた」と話しています。

一方、VR機器メーカーの「ハシラス」は、2つの画面を1つに変換して臨場感はやや損なわれるものの目への負担を大幅に抑えたというゴーグル型の端末を開発しました。事前に利用時間を設定できるようにして3歳から使えるようにしたということで、複数のゴーグルを使えば、同じ仮想空間を大人も一緒に楽しめます。

安藤晃弘社長は「目への負担感に気をつけながら親子で遊んでもらうことで体験の場を広げ、VRを教育用のソフトなどにも生かしていきたい」と話しています。

個人情報 介護給付通知書、別人1000人に発送 大阪市 /大阪

毎日新聞 2017年12月30日

大阪市は28日、介護給付費の利用者に郵送した給付内容通知書について、誤って別の利用者の受給者番号や氏名、給付内容などを記載して送付したと発表した。最大で約1000人分の個人情報が漏えいした可能性があり、原因を調べている。市障がい支援課によると、25日に1万8765人に通知書を送ったが、受け取った利用者から別人の情報が記載されているとの指摘が27日にあった。同課の調査の結果、障害児給付や移動支援サービスなどの一部利用者への送付内容に誤りがあったことが判明した。

作業所通所者に年越しそば振る舞う 茂木・青梅協議会 下野新聞 2017年12月31日



通所者にけんちんそばを振る舞う青梅協議会の会員

【茂木】「そば処おうめ」を営む青梅協議会の安田忠雄（やすだただお）会長（63）ら会員4人が27日、茂木の町障害者福祉作業所「ともだち作業所」を訪れ、通所者や職員にけんちんそばを振る舞った。

同協議会は、同作業所の通所者らが畑で作ったキュウリを漬物用に受け入れており、お礼として毎年「年越しそば」を振る舞っている。4人は調理室で46人分のそばをゆで上げて提供。野菜たっぷりの温かいそばは好評

で、通所者は次々とお代わりをしていた。

安田会長は「一生懸命キュウリを育ててもらってありがたい。青梅のそばを食べて、いい年越しをしてほしい」と笑顔で話した。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行